

「ゆききの岡」考

北川 和秀

一、はじめに

「ゆききの岡」という大和国の歌枕があり、鎌倉時代の和歌に二十五首ほど用例がある。この歌枕は万葉集巻八の一五五七番歌にある「逝迴丘」を典拠とするが、今日この三文字は「ゆきみるをか」が定訓となっており、飛鳥川が裾に沿って流れている岡の意で、地名とはされていない。「ゆききの岡」は万葉歌を誤読した結果生じた、実在しない幻の地名ということになる。ただ、そうではあっても、この歌枕は鎌倉時代以来、近代に至るまで用例があり、その所在地についても複数の説が生じ、実在の地名として認識されてきた。地理的に万葉故地でもあるので、この歌枕について考察することは、万葉集の受容史としても意味があるろうと考える。

二、万葉集一五五七番歌の本文と訓

万葉集一五五七番歌は次の通りである。部立ては秋雑歌。

故郷の豊浦寺の尼の私房に宴する歌三首（その一首目）

明日香河逝迴丘の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ

右の一首は、丹比真人国人のなり。

本文異同は、次点本の類聚古集、紀州本、広瀬本は「逝迴丘」、新点本の神宮文庫本、西本願寺本等は「逝迴岳」、寛永版本は「逝回岳」である。訓は次点本・新点本を問わず「ゆききのをか」で一致している。

諸注釈の訓も仙覚以下「ゆききのをか」で一致していたが、『万葉集略解』（寛政十二年）800）では、「ゆききのをか」と訓みながらも、本居宣長の「ゆきたむをか」説を紹介している。『万葉集古義』もこれに従って「ゆきたむをか」と訓んで、「後にゆきゝのをかと云て、地名とするは、ひがことなり」と注記している。以後、昭和十年代までの諸注釈においてはこの「ゆきたむをか」が主流になった。

武田祐吉『万葉集全注釈』は、古事記上巻の「宇知微流 斯麻能佐岐邪岐 加岐微流 伊蘇能佐岐於知受」の「みる」と同語として「ゆきみるをか」と改めた。

澤瀉久孝『万葉集注釈』も「ゆきみるをか」を採用し、「たむ」を不可とする理由について、「たむ」は上一段動詞であるから連体形は「たむる」と訓まねばならないとしている。

土屋文明『万葉集私注』は、「射水川 伊由伎米具禮流 玉くしげ 二上山は」（三九八五番歌）の例をあげて、字余りを厭わずに「ゆきめぐるをか」と訓んでいる。

このように、「ゆきめぐるをか」と訓む私注はあるものの、全註釈以後は、ほぼすべての諸註釈が「ゆきみるをか」と訓んで今に至っており、今日これが定訓となっている。

三、中世和歌における歌枕「ゆききのをか」

「ゆききの岡」が歌論書等に最初に登場するのは、平安時代末期に成立した『奥義抄』と『五代集歌枕』である。このうち『奥義抄』には「二十五 出万葉集所名」の「岡」の項に「むかひのをか ならしのをか ゆきゝのをか……」とある。ここには地名が列挙されているのみで歌はない。万葉集一五五七番歌を引くのは『五代集歌枕』が最初である。

丹比国人

あすかがはゆききのをかの秋はぎは今宵の雨にちりかすぎなん（五代集歌枕598）

その後、この歌は『新勅撰和歌集』（嘉禎元年1235）に採られ、『夫木抄』『歌枕名寄』『名所歌枕』『類字名所和歌集』にも採録されて、歌枕として定着していった。

「ゆききのをか」をよんだ和歌は、『新編国歌大観』『私歌集大成』を検索すると、重複は除き、鎌倉時代から江戸時代まで四十余首あり、そのうち鎌倉時代の作歌は二十五首ある。以下それを列挙する。排列は作歌年代順とし、年代未詳の歌はおおよその推定年代に依った。

建永元年仙洞御歌合に、朝草花

我が袖は今朝もほしあへず飛鳥河ゆききの岡の萩の白露（壬二集2383）秋部 藤原家隆

右勝

範宗朝臣

秋はなほ時雨れぬ袖も露霜にぬれてゆききの岡のはぎ原（院四十五番歌合建保三年48）

夏と秋とゆききの岡のよるの雨に萩のふるえは色替りけり（紫禁集944）順徳院

岡雪

まつ人のゆききのをかもしら雪のあすさへふらば跡やたえなん（壬二集648）

光明峰寺入道撰政家百首

岡郭公

ほととぎすがすむやどにとひなれてゆききのをかのやすらひの声

（道助法親王家五十首339）夏

岡郭公

ほととぎすよはの名残はあすかがはゆききのをかに又もたづねん

（道助法親王家五十首342）夏 信実朝臣

岡郭公

玉ばこのゆききのをかの郭公いま一こゑにくらすころかな

（道助法親王家五十首350）夏 藤原孝継

題しらず

権律師尊海

しるたへのそでかあらぬかたび人のゆききのをかにさけるうの花（檜葉集627）饒別

経朝

しるしらずしばしやすらふ旅人のゆききのをかになびく青柳（宝治百首307）春廿首

右勝

教定朝臣

玉ばこのゆききの岡のはつ時雨もみぢのかけをえやはすぐべき

(影供歌合建長三年九月312)

光明峰寺入道前撰政家三十首歌に 普光園入道前関白左大臣

あすか川ゆききの岡のくずかづらくるしや人にあはぬうらみは(新後撰集915)恋歌一

岡刈萱といふ事を

藤原家頼

かち人のゆききのをかのかるかやはをれふすかたやみちとなるらん(雲葉集427)秋歌上

岡屋入道撰政家百首、岡卯花

民部卿為家卿

しろたへのゆききのをかとたどるまで冬にかはらずさけるうのはな(夫木抄2410)夏部一

行路萩

藤原親朝

たび人のゆききのをかの秋のいろを袂にみする萩がはずり(新和歌集173)秋歌

岡花

民部卿入道

旅人のゆききの岡の名のみして花にとどまる春の木の本(白河殿七百首88)春百三十首

岡萩

新大納言

旅人の花ずり衣きぬはなしゆききの岡の萩さけるころ(白河殿七百首225)秋百三十首

文永二年白川殿七百首

正三位知家卿

旅人のゆききのをかのこはぎはらうつればかはる袖の色かな(夫木抄4106)秋部

春岡

春くれば跡ふみわけてさと人のゆききの岡はわかなつむらし(為家集228)春

夏と秋とゆききのをかのをざさはらあけむ一夜のかぜをまつかな(為家千首299)夏百首

岡篠

おくつゆはかつきえぬらし諸人のゆききのをかのみちのささ原(澄覚法親王集251)雑

花薄 露

中務卿親王

⑲ あすか川ゆききのをかの花すすきまねくたもとに露ぞこぼるる(歌枕名寄3236)飛鳥篇

前大納言具房家歌合に、萩露といへる事を 阿闍梨覚玄

⑳ つゆは袖にうつりにけりな旅人のゆききの岡の秋はぎの花(続門葉集253)秋歌上

㉑ あすからはわたらぬ袖もほしわびぬゆききのをかの萩の下つゆ(文保三年御百首2935)

大僧正道順秋二十首

岡花

左大弁宰相

㉒ 旅人のたよりにつけて事とはんゆききの岡の花はさくやと(龜山殿七百首77)春百三十首

岡五月雨

以藤

㉓ たび人のそでほす程のひまもなしゆききのをかの五月雨のころ(北野宝前和歌27)

夏五十首

「ゆききの岡」をよんだ最初の歌は、の建永元年(一一二〇六)の仙洞歌合の折の藤原家隆の作である。この歌は、明日香川と萩とが万葉集一五五七番歌と共通しており、万葉歌を踏まえたものである。

この歌は『卿相侍臣歌合』の判詞に「ゆききの岡、などはめづらしきさまなれども」という一節がある。これ以前に「ゆききの岡」をよんだ歌はなかったとみえて、新鮮な地名と感じられたのであろう。

この歌で、作者の袖が萩の白露に濡れたのは、作者がゆききの岡を通ったからである。もちろん、それは歌の中でのことであって、実際に作者がゆききの岡に行ったわけではないが、ここで「ゆききの岡」の萩をうたう必然性は、「ゆきき」が往来、往還を意味する語だからであろう。家隆が万葉集一五五七番歌を踏まえた歌をよむことになったきっかけは、この歌の「ゆきき」という語に往来の意味を重ね合わせた故と思われる。

家隆にはもう一首「ゆききの岡」をよんだの歌がある。

岡雪

まつ人のゆききのをかもしら雪のあすさへふらば跡やたえなん（壬二集648）

光明峰寺入道撰政家百首

この歌には飛鳥川も萩もよまれず、季節も冬であって、完全に万葉歌から離れている。「ゆききの岡」については、の歌と同じく往来という意味を重ね合わせている。

これら家隆の二首に限らず、「ゆききの岡」に往来の意味を重ねた歌は極めて多い。「ゆききの岡」をよんだ前掲の鎌倉時代の歌二十五首の中に、「旅人」を含む歌が八首（

④⑤）、「道」に掛かる枕詞「たまぼこの」を「ゆききの岡」に冠したものが二首（あり、「たどる」（や「ふみわけ」（とよむ歌もみえる。また、歌中に「袖」「たもと」「露」などを含んで、の歌と歌意に共通点のある歌が五首）②③）ある。これらの歌における「ゆききの岡」は、いずれも人がそこを通過する岡という扱いであり、「ゆききの岡」という語形がこれらの作に繋がったといえる。

また「夏と秋とゆききの岡の」とうたう二首（）は、夏から秋への季節の移行を「ゆききの岡」と重ね合わせている。

このように、「ゆききの岡」という歌枕は、それがどこにある、どのような地なのかとは無関係に、「往来」という意味と重ね合わせてうたわれることが専らであった。

四、中近世における「ゆききの岡」の比定地

中世の歌人達にとって、「ゆききの岡」が具体的にどの岡を指すのかなどという興味や認識はなかったかもしれないが、それでも、歌枕として定着してゆくと、具体的な比定地が生じたようである。以下、中世・近世の文献から管見に入った参考となるものを挙げる。

念誦唄といふ寺に参り、ゆききのをか逝回岡の観音に参れり。卅三所のうちにて、誠に人の往来もしげく見えたり。（『吉野詣記』二月二十九日条）天文二十二年1553

逝回岳八今岡寺アル所トソ（『万葉代匠記』精選本一五五七番歌）元禄三年1690

東光山龍蓋寺 俗云岡寺……天智天皇御願此地本名逝回岡。因舒明天皇宮都岡本宮、称岡本寺略曰岡寺。……丹比飛鳥川ゆきくの岡の秋萩はけふ降る雨に散か過なん

逝回丘ユキキ在岡飛鳥二村間（『大和志』卷二十四 高市郡「山川」）
（『和漢三才図会』卷七十三和州高市郡）正徳二年1712

龍蓋寺在岡村東。山号東光、俗呼岡寺。……（同「仏刹」）享保二十一年1736

逝回岡 同郡（高市郡）、今の岡寺の地なり。然れども元来は岡寺の辺より香久山までのほとりなり。

柳 桜 つつじ 郭公 卯花 萩 薄 葛 苺萱 紅葉
時雨 雪 雨 早蕨 小笹原 飛鳥川

続千

我袖を今朝もほしあへず飛鳥川ゆきよきの岡の萩の白露 家隆

（『大和名所和歌集』）安永元年1779

逝回丘岡飛鳥二村の間にあり

万葉

明日香河逝回岳の秋萩はけふ降雨にちりかすぎなん 丹比真人

続古今

待人のゆきよの岡も白雪のあすさへふらば跡や絶なむ 家隆

新後撰

飛鳥川ゆきよの岡の葛かつらくるしや人にあはぬ恨は 普光園入道前関白左大臣
をかもとのみやじよめい 飛鳥池工房遺跡 飛鳥坐神社
岡本宮舒明天皇の皇居也。又齊明天皇も岡本宮に遷り給ふよし日本紀に見たり。玉林抄に曰、岡本宮は
たちはな 橋寺のひかし逝回岡即今の岡寺の地に礎のこれり。（『大和名所図会』）寛政三年1791



これらを見ると、「ゆききの岡」を岡寺の岡とするものが目立つ。の『吉野詣記』には岡寺という寺名は書かれていないが、著者の三条西公条は多武峰から橋寺に向かう途中に逝回岡の観音に参詣していること、岡寺は西国三十三所の札所の一つで如意輪観音を本尊とすることから、この「逝回岡」は岡寺に相違ない。「誠に人の往来もしげく見えたり」の「誠に」は、「ゆききの岡」というその名の通りに、という意と思われる、鎌倉時代の和歌と同様、ここでもやはり「ゆききの岡」という地名に往来の意を重ね合わせている。他に、

の『万葉代匠記』、の『和漢三才図会』、の『大和名所和歌集』も岡寺の地と明記している。ただし、では「元来は岡寺の辺より香久山までのほとりなり」ともある。やや不明瞭であるが、岡寺のあたりから香具山までの範囲内の何れかの丘ということであろうか。

一方、の『大和志』との『大和名所図会』では、「ゆききの岡」は岡村と飛鳥村との間にあるとする。現在の明日香村の大字では、飛鳥寺や万葉文化館は大字飛鳥、万葉文化館のすぐ南の明日香民俗資料館やその南の酒船石は大字岡である。

の『大和志』で、「逝回丘」には「在岡飛鳥二村間」とあり、「龍蓋寺(岡寺)」には「在岡村東」としているので、「ゆききの岡」と岡寺の地とは明らかに別の場所と認識していることが伺える。の『大和名所図会』では、「逝回丘」には「岡飛鳥二村の間にあり」とし、別項として立てる「東光山龍蓋寺」の項には「ゆききの岡」に関する記述は一切なく、やはり「ゆききの岡」と岡寺とは別の地としているようである。

以上のように、「ゆききの岡」の所在地には、岡寺の岡説と、岡村・飛鳥村の境界付近説との両説の存在が知られた。

五、近代の「ゆききの岡」

近代における「ゆききの岡」の用例は二例見出せた。今後も用例の収集に努めたい。用例の一つ目は明治三十六年の長塚節の短歌である。

橋寺より飛鳥へ行くみちのかたへに逝回ゆききの丘といふにのぼりて

たびゝとの逝回ゆききの丘の小島には煙草の花はさきにけるかも (『長塚節名作選』二二)

長塚節は明治三十六年に奈良・飛鳥を旅行している。この歌はその折の作である。歌集によれば、右の歌は八月五日から八日の間と考えられる。詞書によれば、ゆききの岡は橋寺から飛鳥へ行く道の傍らにあり、短歌では、ゆききの岡には煙草を栽培している小島があるということになる。この歌のゆききの岡は、前節で見た岡寺の岡とすることも、岡村と飛鳥村との間にある岡と考えることも可能である。ただ、岡寺の岡は、かなり勾配が急で、岡といよりは山というイメージであり、煙草を栽培する小島があるというのには違和感を憶える。

用例の二つ目は、「飛鳥名所」というタイトルの、四枚一組の絵はがきである。そのうちの一枚に、「ゆきゝの岡より香具山、耳成山を望む」という説明がある。

画面奥、中央やや右よりにあるのが耳成山、その手前右側が香具山、画面左端には飛鳥寺とおぼしき寺がある。絵はがきの説明によれば、この写真はゆききの岡から撮ったものとあるので、香具山・耳成山・飛鳥寺がこのような位置関係に見える地がこの写真の撮影地、すなわち「ゆききの岡」ということになる。





絵はがきの製作年代は不明である。ただ四枚組のうち一枚の表側に次のスタンプが捺し
てある。右横書きで「岡寺駅」とあり、その下には「11.11.7」とある。日付印であるが、
これは右横書きで7年11月11日の意か、左横書きで11年11月7日の意か判断しにくい。

日付印が明治や大正のものでも西暦でもないことは明らかであるが、昭和七年十一月十一日なのか、昭和十一年十一月七日なのかは明らかにならない。

絵はがきの写真と、万葉文化館最北部の展望ロビーから撮影した写真（平成三十年九月二
十二日、北川撮影）とを上下に並べて示す。上下の写真を比較すると、耳成山と香久山の位
置関係はよく似ているが、下の写真の方が、二つの山裾の重なり具合が若干大きい。上の写
真は下の写真よりももう少し左（西）からの撮影と考えられる。耳成山の左側に複数見えて
いる森や岡のようなものが二つの写真では必ずしも一致しないが、もう少し西から撮せばか
なり重なってこよう。





昭和44年4月



平成23年10月

上に示した二枚の空中写真はいずれも国土地理院のサイトからダウンロードして、必要箇所だけを切り出し、文字を加えたものである。

右側の写真で、万葉文化館のすぐ西隣には森のようなものが見える。ここは岡になっていて、飛鳥寺の瓦を焼いた瓦窯が発掘されている。瓦窯の岡は現在木が生い茂っていて登ることができないが、絵はがきはこの瓦窯の岡あたりから撮影したものと考えて良いであろう。ここからならば絵はがきのように飛鳥寺や道路が見えるはずである。

一方、左側の写真では、現在の万葉文化館の位置には飛鳥池がある。そして、そのすぐ西隣の瓦窯の岡は、今と異なり、西沿いの道に面した西側が切り開かれていて耕作地のように見える。こういう状態であれば、そこに登ることは可能であろう。



上は昭和三十二年に奈良文化財研究所によって撮影された飛鳥寺およびその南東の岡の写真である。平成三十年に飛鳥資料館で開催された展覧会の図録『あすかの原風景』に掲載されたもので、「飛鳥寺の南東の丘陵 1957年」というタイトルのもと、「丘陵の傾斜地が畑となっています。この丘陵の奥に飛鳥池がありました。現在は奈良県立万葉文化館が建っています。」という解説文がある。「飛鳥寺の南東の丘陵」とはまさに飛鳥寺の瓦窯の岡である。この写真及び解説によっても、当時、瓦窯の岡の西側が畑であったことが知られる。

絵はがきの写真が瓦窯の岡から撮影されたことはほぼ確実であろう。すでに明治の頃から耕作地であったのであれば、長塚節が登った岡もこの岡であったと考えられる。

平成二十三年と昭和四十四年の空中写真には、瓦窯の岡のすぐ西沿いを南北に通る道が見える。この道は、絵はがきにおいて、画面左下から右上方向に続く直線道路がこれに相当しよう。飛鳥寺の東から岡寺の西を経由して橋寺の方に続いている道であり、多くの参詣者がこの道を往来したことであろう。それで、この道のすぐ傍らにある岡が「ゆきき（往来）の岡」と認識されたことは大いにあり得ることと考えられる。瓦窯の岡の所在地は大字飛鳥の南の端、大字岡との境界付近に当たる。これは近世の文献に書かれている「岡村と飛鳥村との間」にほぼ該当すると言って良からう。

六、まとめ

万葉集巻八の秋雑歌一五五七番歌にある「逝廻丘」を誤読したことで生まれた歌枕「ゆききの岡」について考察した。万葉歌を再掲する。

故郷の豊浦寺の尼の私房に宴する歌三首（その一首目）

明日香河逝廻丘の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ

右の一首は、丹比真人国人のなり。

傍線部は現在「ゆきみる岡」が定訓になっている。従うべき訓と考える。「飛鳥川がその裾に沿って廻るように流れている岡」の意で、「ゆきみる岡」は固有名詞ではないが、題詞にある豊浦寺は甘樫丘の北西麓にあったことから、この岡は甘樫丘か、またはその北に位置する雷丘の可能性が高いと考えられる。



飛鳥川は、甘樫丘と雷丘それぞれの裾に沿うように流れている。それ故、甘樫丘も雷丘も「飛鳥川（が）行き廻る岡」とうたわれるに相応しい丘である。ところが、この「逝廻丘」は平安時代以来「ゆききのをか」と訓まれ、鎌倉時代には歌枕として定着することになった。そして、この歌枕は、往来の意の「ゆきき」と重ね合わせてよまれることが多かったので、この岡が具体的にどこにあるのかという関心は稀薄だったものと思われる。

岡寺の岡、またはそのやや北の、岡村と飛鳥村との間の地（飛鳥寺瓦窯の岡か）に比定されるようになった。

『日本国語大辞典 第二版』の「ゆききのおか【逝廻丘】」の項には以下のようにある。大和国（奈良県）高市郡にある丘。明日香村の雷丘（いかずちのおか）とも甘樫丘（あまかしのおか）ともいわれる。歌枕。*五代集歌枕（126頃）上「さだのをか 佐田岡 大和 略 ゆききのをか 同」*新勅撰和歌集（1235）秋上・二三二「あすか河ゆききの岡の秋はぎはけふる雨にちりか過ぎなん よみ人しらず」*文明本節用集（室町中）「逝廻岡 ユキキノヲカ」**補注** 挙例の「新勅撰」は、「万葉 八・一五五七」との共通歌であるが、「万葉集」では「ゆきみる丘」と訓まれ、飛鳥川が迂回して流れる丘という意であるのを、後世地名と考えたところから生まれた歌枕。（以下、省略）

また、第三節で取り上げた新編日本古典文学全集本『吉野詣記』の当該条「**逝廻岡**」の注には「所在地不明。高市郡明日香村の雷丘や甘樫丘辺りの丘かという。歌枕。」とある。これらはいずれも不適切であろう。万葉歌の「ゆきみる岡」は、雷丘または甘樫丘を指す可能性が高いと考えられるが、歌枕「ゆききの岡」は、岡寺の岡または岡村と飛鳥村との境界付近の岡と認識されてきたのであって、これらの解説は両者を混同したものと見えよう。両者は分けて扱うべきものと考ええる。

*『新編国歌大観』と『私歌集大成』の検索に当たっては「日本文学 ≪ゆききのをか≫ 図書館」の「和歌&俳諧ライブラリー」を使用した。

*安田純生「ゆききの岡」（『白珠』42の1。昭和六十二年一月）は、家隆の歌について、「朝草花」という歌題から萩と露とを連想し、そこから思い出した万葉歌の「逝廻岡」を選びとったとする。そして、「ゆきき」には行き来の意が掛けられていることから、以後、逝廻岡には人々が往来する岡のイメージがまつわりついているとする。

*二枚の空中写真は国土地理院のサイトからダウンロードした。平成二十三年の写真は、
<https://maps.gsi.go.jp/contents/ImageDisplay.do?specificationId=1260841&isDetail=true> であり、
 昭和四十四年の写真は、
<https://maps.gsi.go.jp/contents/ImageDisplay.do?specificationId=406656&isDetail=true> である。